

## 古代大宰府と東アジア

佐藤 信

(東京大学名誉教授、大宰府アカデミー学長、大宰府史跡調査研究指導委員長)

はじめに

古代の大宰府は、首都平城京と比肩される都会であった。大宰少貳の小野朝臣老は、平城京を「あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」（『万葉集』巻三、三二八）と歌ったが、海路筑紫国に赴任する柿本朝臣人麻呂が「大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ」（『万葉集』巻三、三〇四）と詠んだように、大宰府は「遠の朝廷」とも称された。高位の長官「帥」（そち）以下の大宰府の官人たちは、『続日本紀』（神護景雲三年〔七六九〕十月甲辰条）に

大宰府言さく、「この府は人・物殷繁にして天下の一都会なり。…」と「天下の一都会」と称している。宮都の平城京に並ぶ都市像を自負している。大宰府史跡の発掘調査の進展により、かつて鏡山猛氏により「大宰府都城」と呼ばれた条坊制をもつ大宰府の都市像も明らかになった。

あたらしい日本古代史の研究は、めざましく進展している。その動向は、①東アジア（東ユーラシア）的視野から日本列島の古代史をみること、②発掘調査成果や新発見の木簡など出土文字資料によって、歴史像が具体的・立体的に再構成されるようになったこと、③こうして列島各地域の歴史像が明らかになり、境界を越えた盛んな地域間交流がわかったこと、と整理できる。そして、④日本列島の古代史が多角的に展開したとみられるようになってきた。かつて、律令国家が編纂した六国史・律令などの文献史料によって、一国的視野から国家・天皇・畿内を中心に描かれがちであった古代史像は、東アジア的視野から列島各地域の古代史像の総体として描かれるようになってきた。中央と地方の両方からの視座を総合して列島全体の古代史像が構想されている。

こうした動向では、日本律令国家が中央集権的な体制をどのように実現し得たのかが、大きな焦点となっている。大宰府史跡は、平城宮跡・多賀城跡（陸奥国府でもある東北城柵）とともに日本古代の「三大史跡」ともいわれるが、地方に置かれた最大の官衙大宰府の解明は、中央と地方を結ぶ接点を理解する上で、大きな位置を占める。

大宰府史跡では、福岡県立九州歴史資料館による60年にわたる発掘調査・研究の蓄積によって、古代大宰府像の解明が格段と進んだ。また大宰府市教育委員会などによる条坊の調査・研究成果なども合わせて、古代都市大宰府の実像が格段に見えてきた。平城宮跡では奈良文化財研究所により古代宮都平城京・平城宮の実像が明らかになり、多賀城跡でも宮城県立多賀城跡調査事務所により古代東北城柵・陸奥国府の実像が解明されてきた。この他地方官衙の国府・郡家の実像も各地で明らかになってきて、律令国家の地方支配の構造が立体的に明らかになってきている。

二〇一〇年に平城遷都一三〇〇年を期して奈良文化財研究所の平城宮跡資料館の展示が

更新され、多賀城の発掘調査五〇周年を期して宮城県立東北歴史博物館で特別展「多賀城・大宰府と古代の都」が行われ、また新しい九州歴史資料館（小郡市）が開館特別展「大宰府展」を開催した。二〇一五年には、「古代日本の『西の都』－東アジアとの交流拠点－」が日本遺産に認定された。列島の古代史を、東アジアとの関係から多元的に理解する上で、これらの調査・研究成果の総合的な検討が改めて求められている。

## 1. 遠の朝廷大宰府

### (1) 遺跡群としての大宰府史跡

古代大宰府は地方最大の官衙であり、政庁正殿の都府楼を中心として、様々な機能を果たす多様な施設から構成されていた。大宰府を構成する諸官司（曹司）や観世音寺などの寺院、防衛のための水城・古代朝鮮式山城群など、広範囲・多種類に及ぶ。

史跡としては、

大宰府跡・大宰府学校院跡・観世音寺境内及び子院跡・筑前国分寺跡・国分瓦窯跡・筑前国分尼寺跡・塔原塔跡（筑紫野市）、大野城跡・水城跡・基肄城跡・阿志岐山城跡（筑紫野市）・前畑遺跡（同）、鴻臚館跡（福岡市）・怡土城跡（糸島市）・宝満山

付随する官司や生産遺跡として、

不庁地区（官衙群跡）・来木地区（官営工房群）・月山東地区（官衙跡）・大宰府条坊跡（「朱雀大路」など）、客館跡、主船司・警固所

大宰府を取り囲むネットワークの史跡・遺跡群としては、

古代山城跡（古代朝鮮式山城跡・神籠石系山城跡）・烽（とぶひ）群・地方官衙遺跡（国府・郡家）・瓦窯跡（老司瓦窯跡など）・土器窯跡（牛頸須恵器窯跡〔大野城市〕など）

寺院・神社では、

観世音寺・戒壇院・筑前国分寺・国分尼寺・塔原塔跡・竈戸山寺・宝満山・太宰府天満宮（安楽寺）・香椎宮

また、大宰府をめぐる交通路関係遺跡として、

山陽道跡・西海道跡・古代官道跡、駅家跡

などがある。これら大宰府をめぐる遺跡群は、総体として大宰府史跡群ととらえられよう。

### (2) 大宰府史跡の調査・研究

大宰府史跡の発掘調査・研究を中心的に進めてきたのは、福岡県立九州歴史資料館である。大宰府史跡や関連遺跡の発掘調査・研究のほか、史跡の整備や博物館展示も進め、さらに九州各地における発掘調査を牽引する役割も果たしてきた。大宰府史跡では、地道な発掘調査の積み重ねの上に、多くの調査成果が蓄積されてきた。大宰府木簡の出土も大きな成果であり、また太宰府市教育委員会などの発掘調査による大宰府条坊遺跡の解明も注目される。

アジアと日本列島を結ぶ「文明のクロスロード」に位置する遺跡群としての大宰府史跡群は、東アジアにおける日本律令国家を解明する上できわめて重要な研究対象である。その際、遺跡だけでなく史料・建造物・美術工芸品など多様な文化遺産からなる歴史資料を、総合的・学際的に調査・研究することが求められる。かつての「大宰府研究会」などは、

そうした意図をもっていた。大宰府をめぐる多様な歴史資料・文化遺産を学際的・多角的に調査・研究する「大宰府学」が、日本史・考古学・建築史・美術史・国文学・歴史地理学・東洋史・保存科学などの学際的な共同研究によって進められることが期待される。

## 2. 大宰府をめぐる人びとー大伴旅人ー

大宰府をめぐる人々として、神亀五年（七二八）頃から大宰帥として赴任し、「筑紫歌壇」と呼ばれる和歌群を『万葉集』に伝えた大伴旅人についてみてみたい。大伴旅人関連の『万葉集』の和歌群やその題詞・左注からは、大宰府の府官館である「帥家」における「梅花の宴」など、府官・国司たちとの交流や、国内神社への拝礼、近郊への遊覧、大宰府周辺の交通体系を示す駅家の利用、離任の際の帰路など、様々な実像がうかがえる。

天平二年（七三〇）正月、帥宅にて梅歌の宴を開く

○「梅花の歌三十二首（序并せたり）・天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まるは、宴会を申ぶるなり。時に初春の令き月にして、気淑く風和み、梅は披く、鏡の前の粉を、蘭は薫らす、珮の後の香を。しかのみにあらず、曙の嶺に雲移り、松羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥うすものに封められて林に迷ふ。庭には新しき蝶舞ひ、空には故つ雁帰る。ここに天を蓋にし、地を座にし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開き、淡然としてみづから放に、快然としてみづから足る。もし翰苑にあらずは、何を以ちてか情をのべむ。詩に落梅の篇を紀せり。古と今とそれ何ぞ異ならむ。うべ園の梅を賦みていささか短詠を成すべし。」八一五～四六

帥旅人の府官館において中国の故事にならって開かれた著名な「梅花の宴」に列席した人々は、

大貳紀卿・小貳小野大夫（老）・小貳粟田大夫（人上か）・筑前守山上大夫（憶良）  
・豊後守大伴大夫（三依か）・筑後守葛井大夫・笠沙彌（満誓）・主人（大伴旅人）  
・大監伴氏百代（大伴百代）・小監阿氏奥島・小監土氏百村（土師百村）・大典史氏大原・小典山氏若麿（山口若麿）・大判事丹氏麿・薬師張氏福子・筑前介佐氏子首・  
壱岐守板氏安麿（板茂安麿か）・神司荒氏稲布・大令史野氏宿奈麿・小令史田氏肥人  
・薬師高氏義通・陰陽師磯氏法麿・算師志氏大道（志紀大道か）・大隅目楨氏鉢麿・  
筑前目田氏真上・壱岐目村氏彼方・対馬目高氏老・薩摩目高氏海人・土師氏御道（土師水道）  
・小野氏国堅・筑前掾門氏石足（門部石足）・小野氏淡理（小野田守か）

という大勢で、美しい春の饗宴を楽しみ和歌を詠み交わした。のち九国三島となる西海道の諸国・島の国司・島司の一員も参列しており、大宰府の府郭には諸国・島の「出張所」的な出先施設が当然あったとみられる。

旅人は、大宰府を発して都に戻る際、水城の門の所で馬を留めて大宰府の庁舎を遠望しており、水城まで府の官人たちの見送りがあった。水城の門は大宰府域の境界でもあった。

以上の大伴旅人のほか、七四〇年に乱を起こした藤原広嗣（少弐）、玄昉（観世音寺別当）、吉備真備（大弐）、配流されてきた菅原道真（権帥）そして九三九年に乱を起こして大宰府を焼いた藤原純友、刀伊の入寇を撃退した藤原隆家など、古代史上著名な人々が大宰府をめぐる人々として挙げられるのは、やはり大宰府が占める歴史的位置の重要性に応じている。

### 3. 大宰府の機能

#### (1) 大宰府の特質

日本古代の地方官衙としては、大宰府、国府（国衙）、郡家（郡衙）のほか郡家出先機関・城柵・関・駅家などが挙げられるが、その最大のものが大宰府である。対外的な外交や軍事を管轄し、西海道の九国三島を統括するという国府より上位の組織であり、官人の規模も国府をしのぐ。長官の大宰帥の官位相当は親王四品・従三位であり、大国の守の従五位上相当をはるかに上回る上級貴族である。大宰帥の職掌には、国司とは違って「蕃客・帰化・饗言燕」が規定されており、中国・朝鮮半島や隼人・南島に対する対外外交を担うところが、大きな特質である。対外関係研究によって議論された、海外使節が持参した国書を大宰府が先行開封することや、渡日した新羅使・渤海使などの海外使節との交渉・接遇は、アジアとの外交窓口としての大宰府の役割を象徴する。九世紀以降、鴻臚館そして博多で展開する唐・宋・新羅商人たちとの第一次的な交渉・交易も、大宰府ならではの役割といえる。

外交や西海道統括という中央政府に準じた外交・行政を担うことから、大宰府は、大規模な官人構成をもち、管下の官衙（曹司、実務官衙）として多様な部署をかかえている。

古代都市としての大宰府については、大宰府が平城京にならう条坊をもつ府郭を備えていたことが、一般国府とは異なる。大宰府の条坊遺跡は、太宰府市教育委員会による発掘調査によって明らかになった。「朱雀大路」など、条坊の姿が知られる。

都府楼の政庁前面に広がる官庁街としての不庁地区の展開、朱雀大路や条坊道路に区画された街区の存在、その中で長大な南北棟建物が規格性をもって配置され舶来品が多く出土した「客館」施設、また菅原道真の館跡と伝える榎社や府下の寺院となる般若寺などのあり方は、大宰府の府郭が宮都にならう条坊をもち、「天下の一都会」と称される都市の実態をもったことを示す。

多賀城跡（陸奥国府、宮城県多賀城市）にも、道路に沿って方格地割をもつ都市域（山王遺跡・市川橋遺跡）が外郭南西に展開し、立派な四面庇建物や園池をもつ国司館などの宅地が建ち並んだことが知られたが、これは八世紀後期～九世紀に形成されている点が、より早くから存在した大宰府跡とは異なっている。

#### (2) 大宰府の機能

大宰府が果たした機能は、外交・軍事・行政・財政・宗教・給食・交通などの諸分野にわたる多様なものであった。外交機能をもち西海道の統治拠点でもあり、国府の上に位置づけられたことが、多様な機能に結びつく。

##### 【外交】

外交機能は、東アジアの中国・朝鮮半島や隼人・南島に対する外交を担うもので、新羅使・渤海使や南島などからの外国使節等の来朝に対応している。日本からの外交使節も、遣唐使だけでなく、『万葉集』に和歌群を残す遣新羅使なども、大宰府を経由して海を渡って行った。これらの外交使節を迎える迎賓館として、博多湾岸には鴻臚館（筑紫館）が営まれ、大宰府との間は水城の西門につながる直線官道で結ばれていた。

##### 【軍事】

軍事機能は、対外防衛そして対隼人の性格をもって、大宰府を守るための様々な制度化・造営が行われた。防人、烽火（とぶひ）、大野城・基肆城・阿志岐山城などの古代朝鮮

式山城群、水城、八世紀後期に吉備真備によって築かれた怡土城などが防衛のために営まれた。防人は東国の兵士が動員されて大宰府に直属し北部九州の防衛に当たる兵力であり、大宰府の防人司が管轄した。西海道諸国の軍団の兵力も、直接には諸国国司の管理下にあるが、国司の上に大宰府が位置した。都府楼西方の地からは「御笠／団印」「遠賀／団印」の筑前国の軍団印が出土して、大宰府による管内諸国の軍団管理が知られる。また「大野城司」が知られ、大野城の維持管理、軍事的防衛や倉庫群に蓄積された米穀の管理などに当たったと考えられる。

防人・烽火や水城は六六三年の白村江の敗戦の翌年に緊急に作られ、さらに翌年に長門城・大野城・基肆城などの古代朝鮮式山城群が作られたことが『日本書紀』にみえる。

○『日本書紀』天智三年（六六四）是歳条

対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防（さきもり）と烽（とぶひ）とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

○『日本書紀』天智四年（六六五）八月条

達率答本春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ。

水城には、版築の敷粗朶工法、柱の埋め殺し工法など半島的な新技法が用いられ、土塁下に営まれた暗渠導水管の設置にはきわめて精密・大規模な工法が用いられている。

#### 【行政】

行政機能は、九国三島の西海道諸国に対する行政を総括する役割である。

#### 【財政】

財政機能では、西海道諸国（日向・薩摩・大隅を除く）の調庸物は、長門国以東の一般諸国（陸奥・出羽を除く）のように平城京に貢進するのではなく、大宰府に集約された。大宰府の「蔵司」は、こうした大量の調庸物などを収納する倉庫群が配置された官司であった。諸国で口分田を班給した余りの「公田」（乗田）では、耕地を農民に賃租して収穫の五分の一を地子として納めさせる地子経営が行われた。その公田地子は、内国では太政官に送納して太政官の財源となったが、西海道では、大宰府に送納されてその財源となった。八世紀半ばからは、「府官公廩」として大宰府官人の得分となった。この府官公廩も、大量に大宰府で収納され、府官たちに配分されたと考えられる。こうした大宰府に勤める府官や下級官人たちの生活のための交易の場市場も必要であり、府郭が多くの人をもつ都市であったことにも対応する。

#### 【宗教】

宗教機能としては、大宰府とセットで営まれ、西海道を代表する寺院として観世音寺がある。その大規模なあり方は、延喜五年（九〇五）の「観世音寺資財帳」（国宝）にみられる。「府大寺」とも位置づけられ、境界の地で対外的に国土を守るための宗教施設でもあった。戒壇は、正式な僧侶となるための受戒の儀式を行う場である。七六一年（天平宝字五）に内国の東大寺、東国の下野薬師寺と並んで西海道の観世音寺が正式な戒壇と認められた（「本朝三戒壇」）。また、神祇信仰に関しても、中央政府の神祇官に相当する「主神」（かんづかさ）があり、大宰府管内の神祇を管轄した。宇佐八幡宮や宗像神社などの神社は、大宰府の主神を介して中央の神祇官と連絡した。

そのほか、大宰府付属の官営工房などによる【生産】、官人への給食を担う「主厨司」

にみられる【給食】、西海道をはじめとする官道（駅路・伝路）や駅家を管轄する【交通】などの機能が、大宰府には認められる。

### （3）大宰府の諸施設

発掘調査から明らかになった大宰府関連の諸施設について、いくつか概観したい。

大宰府政庁…「都府楼」と称される。巨大な礎石が基壇上に現存する正殿を中心とするが、南から南門・中門・正殿・後殿・北門が南北に並び、中門と正殿を結ぶ回廊や南北の南門・北門が発する築地によって南北三つの区画に分けられている。中央の区画の正面に東西棟の正殿があり、その前面広場の東西にそれぞれ二棟の南北棟の脇殿が配置されている。下層の七世紀後期の掘立柱建物群（配置は未詳）からなる第一期、八世紀になって上記のような配置で礎石建物群が立ち並んだ第二期、天慶四年（九四一）に藤原純友の乱で焼失したのち同様な配置で再建され、現存の正殿の礎石・基壇の時期にあたる第三期と時期区分される。後殿の近くからは削屑をふくむ大宰府木簡が大量に出土して、後殿が文書行政の場となったと推定された。

不庁地区…都府楼前面の東西道路の南に、官衙（曹司）群の区画が並んで展開した地区が、発掘調査で確認された。政庁前面に大宰府を構成する諸官司（曹司）の官庁街があった。この地区からは木簡も多く出土しており、とくに基肄城の穀の分配について記した文書木簡は注目される。この木簡は、基肄城の倉庫群に貯積された大量の稲穀が大宰府の管理下にあり、筑前・筑後・肥前・肥後などの諸国にその稲穀を班給する際に、大宰府官人の大監が派遣されたことを示している。

#### ○大宰府史跡不庁地区出土木簡

為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随 大監正六位上田中朝〔

重要文化財となった大宰府木簡としては、西海道管内諸国からの紫草・綿など調庸物の貢進物荷札木簡が出土している。大宰府が、管内諸国からの調庸を集約したことを示す。また、南島木簡も出土した。「奄美島」・「伊藍島」（沖永良部島）などと記載した木簡で、南島との交流を示す。なお平城宮跡からは、大宰府に集まった諸国の調綿の一部を大宰府から平城宮宛てに貢進した際に、大宰府で付けた貢綿荷札木簡が多く出土している。大宰府で書かれたこの貢綿荷札木簡群は、材に広葉樹を利用する特徴があり、もっぱら檜・杉の針葉樹を材とした古代木簡の中で特別な特徴を示す。

蔵司地区…都府楼西側の丘陵部に位置し、大宰府に集められ保管される調庸物などの物資を貯積する国家的倉庫群である正倉院が営まれた。礎石群が大量に位置したことが、江戸時代の黒田藩による絵図で知られ、最近の発掘調査でその実像がうかがえた。

学校院…月山地区の東方の地に、学校院が存在した。西海道の諸国の国学の上に位置する教育施設である。官人の再生産をめざして府官の子弟を教育した。孔子廟があり、積奠（孔子祭り）の儀礼が行われた。吉備真備が大宰府に赴任した時代に中国式の積奠儀礼が整えられた。朝鮮半島と類似する文様磚の出土が知られるが、発掘調査はまだである。

観世音寺…西海道諸国の仏教を統括し、諸国国分寺の上に立つ「府の大寺」であった。七世紀の梵鐘、『観世音寺資財帳』や仏像などの文化財が知られる。創建期をめぐる検討が課題となっている。

鴻臚館跡（筑紫館跡）…外国使節や日本から派遣される遣唐使・遣新羅使たちを迎える迎賓館が博多湾沿いに営まれていた。東に開いた門は、水城の西門につながる直線官道と

むすびついた。のちに鴻臚館交易といわれる外国使節との交易の場となった。南館・北館の二つの客館からなり、掘立柱建物群から礎石建物群に変遷したことが発掘調査で明らかになった。九世紀代の、優秀なイスラム陶器・ガラス器、中国陶磁器、新羅陶磁器などが出土した。鴻臚館跡からの出土木簡には、豊前国京都郡や南海道の讃岐国三木郡からの庸米等の貢進物荷札木簡があり、大宰府や平城京に送られるべき貢進物が、大宰府管下の国家的施設であった鴻臚館に転送されたことが知られる。

○・京都郡庸米六斗

(豊前国)

・□□ [ ] □ [ ] 月

縦一八六mm×横二一mm×厚八mm

○讃岐国三木郡□□六斗

二一三×(二一)×四 ○三一型式

おわりに

あたらしい日本史の動向の一つは東アジア（ユーラシア）の国際的視座から列島の歴史を見直す所にある。「文明のクロスロード」としてユーラシア・東アジアの交流史の中で大宰府が果たした機能を明らかにすることは、その点大きな意義がある。また、遺跡群としての大宰府史跡のあり方や古代都市としての大宰府の実像の解明は、他の地方官衙・城・寺院・生産遺跡・交通路などの遺跡の解明とリンクして、古代律令国家における中央と地方との関係を立体的にとらえ直す道を示してくれる。

このように大宰府史跡群の調査・研究が進展してきた基盤は、六十年にわたり継続されてきた毎日の地道な発掘調査成果に多くを負っている。地味な発掘調査成果も、それが積み重なり大宰府史跡群の各地区の歴史的意義を明らかにしてきたことは、最近まとめられた大部な報告書群によって知ることができる。こうした継続的・日常的な発掘調査成果の上に、東アジアとの交流、律令国家の構造や古代都市の実像が解明されてきたことを、これからも大切にしていきたい。大宰府史跡群の調査・研究では、ぜひ、今後の戦略的な発掘調査の成果を期待するとともに、史跡の整備・活用と調査・研究成果のさらなる深化を通して、国民・市民に対する発信を進めていきたい。

参考文献

鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房、一九六七年

鏡山猛『大宰府遺跡』ニュー・サイエンス社、一九七九年

倉住靖彦『古代の大宰府』吉川弘文館、一九八五年

倉住靖彦『大宰府』教育社、一九七九年

佐藤信編『日本の時代史4 律令国家と天平文化』吉川弘文館、二〇〇二年

田辺征夫・佐藤信編『古代の都2 平城京の時代』吉川弘文館、二〇一〇年

藤井功・亀井明德『西都大宰府』日本放送協会、一九七七年